

# 博士論文（要約）

夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ

— 『文学論』から「則天去私」へ

岩下弘史

※本博士論文は5年以内に単行本の形で出版される予定であるため、要約の公表で全文の公表に代える。

## 目次

凡例.....	4
はじめに.....	5
第一章 『文学論』の(F+f).....	21
第一節 『文学論』の先行研究およびその問題点.....	21
第二節 (F+f)と心理学—デイヴィッド・ヒュームとの関係.....	28
第四節 『文学論』内における「F」.....	45
第五節 (F+f)の記号の意味.....	58
第六節 (F+f)は誰のものか.....	63
第二章 『文学論』における「文芸上の真」.....	70
第一節 「文芸上の真」をめぐる先行研究.....	70
第二節 「文芸上の真」の歴史的背景.....	74
第三節 『文学論』ノートの「文芸と truth」について.....	80
第四節 『文学論』の定義する「文芸上の真」.....	90
第五節 『宗教的経験の諸相』との関係.....	100
第六節(補遺)「芸術の真」—田中王堂とジョージ・サンタヤナ.....	116
第三章 「文芸の哲学的基礎」—「理想」と「還元的感化」.....	125
第一節 『文学論』と「文芸の哲学的基礎」の関係.....	125
第二節 「文芸の哲学的基礎」の概略.....	138
第三節 モーガンとジェイムズ.....	145
第四節 「文芸の哲学的基礎」における「理想」.....	153
第五節 「文芸の哲学的基礎」における「還元的感化」.....	164
第四章「作家の態度」と「思ひ出す事など」—漱石の二つの立場.....	181
第一節 「作家の態度」の概要と先行研究.....	181
第二節 「自己本位」の確立.....	190
第三節「作家の態度」とジェイムズ思想の関係.....	194
第四節 「自己本位」の意義とその問題点.....	203
第五節 「則天去私」をめぐる先行研究.....	206
第六節 「思ひ出す事など」と『多元的宇宙』.....	228
第五章『明暗』を読む.....	249
第一節 『明暗』と「則天去私」をめぐる先行研究.....	249
第二節 「他者」との「戦争」.....	262

第三節 『明暗』における偶然.....	268
第四節 「宗教」の特徴.....	275
第五節 「融け合い」について.....	280
おわりに.....	294
参考文献.....	302

没後 100 年、生誕 150 年を経た現在、夏目漱石の研究はますます盛んである。漱石は実に多様なジャンルの思想・芸術を吸収しながら自らの思考を深めていったため、その研究も様々な角度からなされてきている。そして、そうした先行研究のなかには、米国の思想家ウィリアム・ジェイムズに着目して、その漱石に与えた影響を検討するものが一定数存在しているが、これは、漱石自身がジェイムズの思想への並々ならぬ共感を表明しているためである。

だがそうした先行研究においては、ジェイムズ思想自体の理解が疎かになっていたりがある。それは、漱石とジェイムズの比較を行う研究が、ジェイムズに関する二次文献をほとんど参照してこなかったという事実にも現れているだろう。

本論文の目的は、こうした不備を踏まえ、従来以上にジェイムズのテキストを綿密に読み解くことに重点を置き、それによって得られた知見から漱石のテキストの新たな意義付けをなすことにある。以下ではその具体的な論点を、論文の構成に沿って示していきたい。

まず「はじめに」では、漱石とジェイムズを比較する先行研究がどのようなことを明らかにしてきたのか、また、どういった点が不十分だったのかを具体的に検討し、それに基づいて本論文全体の見通しを与える。特に重要になるのは、漱石のよく知られた立場である「自己本位」と「則天去私」、および、それらのジェイムズ思想との関わりである。

第一章では、『文学論』の (F+f) という、同著の基盤を成す公式に注目した。この公式の「F」は「意識の流れ」のなかの焦点的要素（認識要素）を表し、「f」は情緒を表すものである。漱石自身示唆しているように、この公式は、ジェイムズの「意識の流れ」という説に基づいているため、この説の意義を明らかにし、そのうえで『文学論』を解釈することで、これまでの研究においては曖昧だと思われていたような箇所を整合的に読むことができる。

特に重要なのは、この公式が「意識の流れ」に基づいているために、それが、常にわれわれの一回限りの「今・ここ」の意識の状態を表すものになっているということである。たとえばある一つの作品が情緒を引き起こすか否かは、需要者がその作品に触れる際の前後の文脈や経験によって決まるが、この (F+f) という公式は、そうした読者個人の解釈の違いを強調する、漱石の「自己本位」の立場を擁護するようなものだった。

一方で、『文学論』がある種の普遍性を求めていたことも事実である。しかし、結局のところ得られた普遍性というのは、「作品に対する感じ方は人によって異なる、ということは普遍的である」というようなことにすぎない。漱石にとって重要な「自己本位」

の立場は、作品の解釈を自らの関心や嗜好に基づいて行うことを意味したが、このことを普遍的な原理とすれば、すべての人の解釈が異なることもありえることになる。これを極端まで推し進めると、世界が「バラバラ」になってしまうところまで行き着くが、そうしたことに対する不安が漱石にはこの時点から存していたということも重要である。

続いて第二章では、『文学論』におけるもう一つの重要な概念である、「文芸上の真」に注目した。まず重要なのは、この「文芸上の真」という概念が漱石独自のものではなかったということである。この概念は、同時代の、特に英国におけるロマン主義と分類される詩人や批評家たちのあいだでも同様に用いられていた。

だが、そうした同時代の英国の文学者と漱石の「文芸上の真」では、その定義において強調する点が若干異なっている。漱石は、文学の受容者（つまり読者）に注目し、その読者個々人が文学において書かれていることについて正しいと思うかどうか、ということ「文芸上の真」の成立条件としたのである。そして、このような考え方は、「科学上の真」に対していわば「宗教上の真」を擁護しようとしたジェイムズの『宗教的経験の諸相』（以下『諸相』）における議論と共通性を持つ。実際、漱石のノートには「文芸と truth」という見出しのもとジェイムズの同著もメモされていた。『諸相』という著作は、個々人の宗教的情緒に注目するものであり、これは個々人の捉え方によって「文芸上の真」が成立すると考えていた漱石の思想と共鳴するようなものなのである。

第三章では、「文芸の哲学的基礎」という評論を検討する。ここでは同評論が強調する、「理想」および「還元的感化」という概念に着目し、これらがジェイムズの思想と共通するものを含んでいたことを明らかにする。前者の「理想」とは、「自己本位」の立場に立ったときに重要になる自身の関心に基づいて、われわれが人生の「選択」をする際に必要になってくるものだとしており、これは心的現象の「主観的側面」を重視するという点において、まさにジェイムズ的な発想であるといえよう。

続いて「還元的感化」という概念である。この聞きなれない「還元的変化」が何を意味するかというと、それは、読者が優れた文学を読み、忘我の状態になり、作者の意識の流れと読者の意識の流れが一つになり、読者が大いなる影響を受ける、という神秘的なものであった。これはある意識と別の意識が一つになることを前提するものであり、その可能性がジェイムズの『諸相』において示唆されていたことは重要である。そして、こうした神秘主義的発想が、漱石のよく知られた「則天去私」へもつながっていくことになる。

第四章では、すでに何度か言及された漱石の二つの立場（「自己本位」と「則天去私」）とジェイムズ思想のつながりについて、さらに詳しく論じている。まずは、ここまで無

前提に用いられてきた漱石の「自己本位」を再検討した。重要なのは、漱石がこの「自己本位」という立場を「理論の承認」を経たものだとしていたことである。この「理論」とは、ジェイムズが『心理学原理』にて展開していた、「世界」に関する説であったと考えられる。

一方で、この「自己本位」という立場は問題含みのものでもあった。これは極端なところまで行くと「独我論」的な主張に行き着き、「他者」の存在がうまく捉えられないということにつながる。この問題こそが、漱石の晩年の関心であり、その解決のために要求されたのが「則天去私」である。

「則天去私」は近年「漱石神話」の象徴のように扱われ、あまり重要視されていない。だが、漱石が晩年に、「則天去私」という語に表されるような思想を持っていたことは事実である。一部の漱石の弟子たちが作り上げた「則天去私」神話は誤りを多く含んでいたが、そのことは「則天去私」が漱石にとって空虚な概念だったということの意味しない。

こうした「則天去私」との関連で重要なのが、ジェイムズの『多元的宇宙』である。同著では汎心論がとられ、われわれが住むこの世界は多数の意識によって満たされていること、この世界の全ては元来お互いが「融け合って」いるようなものであること、概念を去り直観的共感を持ってそうした世界に飛び込むことで、それと「融け合い」、その本性が理解できるようになるということが主張されていた。ジェイムズの「宇宙」と漱石の「天」は類似したものだと考えられる。また、ジェイムズはその本性を理解すべく、概念や論理を捨てることを勧め、「私」を去ることを示唆していたが、こうした点において、「則天去私」とジェイムズの思想は共通したものを持っている。

第五章では、前章で考察した「則天去私」的発想につながるものが見出される、『明暗』という小説作品について検討した。『明暗』の主人公夫妻である「津田」と「お延」は、「他者」を「コントロール」しようとする存在である。重要なのは彼らのそうした「他者」とのやりとりが「戦争」の比喩で表されていることであろう。漱石にとって、「自己本位」の立場では捉えきれない「他者」とのやりとりは、そのような過激な言葉で捉えられなくてはならなかった。

だが「戦争」は結局のところ失敗に終わる。「自己本位」の立場を超える「他者」に関して、その全てを「コントロール」することなど不可能である。では、自らの「コントロール」を超えて厳然と存在する「他者」を前にして、どうすべきなのか。この問題に対して、漱石は宗教的なものを想定していた。そして、『諸相』のなかでジェイムズも、「他者」とのやりとりを漱石同様「戦争」と捉え、そこでわれわれを救いにくるものを、宗教だとしていたことは重要になるであろう。こうした意味において、漱石は宗

教的な思想である「則天去私」を重要視したと考えられるのである。

『明暗』のなかには、こうした「則天去私」につながる発想が見出される。それは「融け合い」と描写される、主人公夫妻間に生じる事象である。ジェイムズは、本来われわれの意識同士というのはお互いに「融け合って」いるようなものであったことを論じていたが、この議論はさらに、世界そのものと「融け合う」という神秘主義的発想と関係していることはすでに述べた。このことと「私を去り、天に則る」ことを求める「則天去私」は共通点を持ち、この「則天去私」に発展しうるものとして、『明暗』における「融け合い」を考えることができるのである。

最後に、「おわりに」では本論文において何が明らかになったのかをまとめ、課題と展望を示している。漱石の基本的な立場である「自己本位」に「理論の承認」を与えたものとして、ジェイムズの『心理学原理』における説があったこと、そしてその「自己本位」の立場がもたらす問題について、「則天去私」という思想が要請され、そこにはジェイムズの『諸相』や『多元的宇宙』の議論と共通するものが含まれていたこと、この二点は特に漱石の思想全体を考えるうえでも重要になるであろう。